

政治家の言葉が荒れている。集団的自衛権行使を可能にする安全保障関連法案への批判に対する自民党国会議員の反論だが、そこには権力を持つ立場に求められる自制心や謙虚さが感じられない。

「マスコミを懲らしめるには広告料収入がなくなることが一番」（大西英男衆院議員Ⅱ 東京一六区）

「法案に反対する学生団体の主張は『だつて戦争に行きたくないじゃん』という自分中心、極端な利己的思考に基づく。利己的個人主義がここまでまん延したのは戦後教育のせいだ」（武藤貴也衆院議員Ⅱ滋賀四区、その後離党）

「法的安定性は関係ない」（磯崎陽輔首相補佐官Ⅱ参院大分選挙区）

巨大与党の議員たちが、かきにかかつて、批判や異論に敵意をむき出しにする。発言した政治家は安倍晋三首相を支持する人物である。首相は法案審議への影響を懸念して火消しに躍起だが、国民の理解が進まない首相のいらだちを、側近たちが代弁したと考えるのが自然だろう。

安保法案の審議をめぐるつては、そもそも首相の「聞く耳を持たない」姿勢が目立つ。野党や憲法学者の「違憲」という指摘に対しては「正当性、合法性については完全に確信を持っている」と断定調で繰り返す。自身や政府に向けられた批判の内容を吟味するよりも、反論や持論の展開が先に立つ

きょうごう 倨傲になる土壌

ので、何時間議論を続けても国民の疑問が晴れない。

首相は著書の中で、敬愛する祖父岸信介元首相が一九六〇年、国民的な反対運動の中で日米安全保障条約の改定を進め、その後内閣総辞職したことを振り返り、「間違っているのは、安保反対を叫ぶかれらのほうではないか」と記した。「自ら反（かえり）みて縮（なむ）くれば千万人といえども吾ゆかん」という言葉を好む首相は「反対が多ければ多いほど、むしろ正しい政治を行っている」と自己陶醉にも似た信念を持つているように見える。

振り返れば、安倍首相は二〇〇六年の第一次政権発足時に「美しい国」というスローガンを掲げた。歴史や文化、自然など日本の良さを見直して世界に発信するという趣旨で、二〇〇七年四月には、理念を国民運動として具現化しようと政府に有識者会議まで設置した。

安倍首相が具体的に何を目指していたのかよくわからなかったが、いまになってみると発想の原点のようなものは見て取れる。それは「国家や国民は、単一的な価値観や道徳観、理想などを整然と共有することができる」というイメージだ。

しかし、これは国家が道徳や信仰など面に踏み込まないという価値中立的な存在であるという近代国家の原則と相入れない。丸山真男が指摘した、天皇中心の「国体」

が真善美の内容的価値を占有した軍国日本。安倍首相の国家観はむしろ、これに近いのではないかと思えてならない。少なくとも、特定秘密保護法の制定や、テレビ局の幹部を呼んで番組内容の聴取を行うなど言論統制にも似た政権党の振る舞いが、そうした懸念を呼び起こしている。

個人の自由について論じた古典「自由論」の中で、ジョン・スチュアート・ミルはこう説いた。

「意見の発表を沈黙させることに特有の害悪は、それが人類の利益を奪い取るということなのである。（略）もしもその意見が正しいものであるならば、人類は誤謬を棄てて真理を取る機会を奪われる。その意見が誤っていると見ても、真理と誤謬との対決によって生じるところの、真理の一層明白にし一層鮮やかな印象を受け取るという利益を失う」

広辞苑を引くと「美しい」という言葉の意味に「余計なものがない」というものがある。異論や反論が「余計な」雑音だと感じ、その排除が「美しい国」につながるのだとしたら、冗談にもならない。

個人の自由を否定し、国家や社会の全体性を原理とする政治思想を「全体主義」という。政治家たちの軽率な言葉の背後に、権力が持つ本質的な危うさが隠れていることを、われわれ国民は見逃してはならない。